

自身の肺がん 自分で見つけた

たばこも吸わない30代のがん治療医が肺がんになったら―。東大病院の放射線科に勤務する加藤大基さん(33)が「東大のがん治療医が癌になって」(ロハス・メディアカル)を出版した。自分のがんを自分で見つけるといふ「医師」ならではの体験と、入院中に担当医の顔を見るだけでうれしくなったという「患者」の気持ちの両方がつづられている。

加藤さんは昨年4月、胸に圧迫感を覚えたことから自らの肺のレントゲンを撮影した。そこで17センチ大の影を見つけ、驚いて同僚に携帯メールで画像を送った。

35歳、放射線科医師が体験記

「患者」の思いもつづる



自分の肛門に指を入れ、肺への転移が多い直腸にはがんがなさそうだと確かめて、ほっとしたという。「どんな検査や治療が待っているのかわかっていた点では、気楽でした。でも、転移性のがんだったら余命は半年から2年ということもわかっていました」

5月に手術を受けた。入院中は日に何度となく担当医に会いたいと思ったが、忙しい医師に遠慮してしまう。「患者」の思いも味わった。

腰が痛い、頭が痛い、というだけで「転移では」とおびえる自分にも驚いた。だが、やがて思うようになつた。

「再発は努力では避けられない。それなら、考えても仕方のないことは考えないようにしよう」

いまも放射線治療医として働く加藤さんは、同じ言葉で自らが担当する患者たちへ伝えていく。

上司に勧められて書いた体験記は、手術から1年後の先月末に出版した。あす10日は36回目の誕生日。これまでと少し違う気分で迎える。「無事1年が過ぎたことがうれしい。がんになつてから、喜びを感じる『しきい値』が下がったんです」 (岡崎明子)

自らの肺のレントゲン写真を指さす加藤大基医師。東京都文京区の東大病院で、吉本美奈子撮影